



巻頭言

「思いを言葉にするために」

私の手元にある『1970年代 女を生きる まだ「フェミニズム」がなかったころ』（加納実紀代／インパクト出版会）には、著者のサインがしてある。2007年に発足した「さいたま市女性学研究会（ゆい）」（以下、「女性研」と略）は、パートナーシップさいたまなどで学んだ人の有志のグループである。2009年、女性研が初めて企画した講座で「歴史をふりかえり、記録することの意味とは」を話してくださったのが女性史研究家の加納実紀代さんである。タイトルが心に刺さって購入したこの本にサインをいただいた。

久しぶりに再読した。325ページもある分厚い本がなかなか読み進まない。1970年代、私が学生から社会人として働き始めた時代で、身に覚えのあるところは納得できるのだが、研究の蓄積の言葉が理解できず、現象が理解できない内容がたくさんあるのだ。それらを自分の行動や考えと照らし合わせて理解し、自分の言葉で話せるようになるには、まだまだだと感じる。だから、何度でも繰り返し、見方を変えながら、学んでいこう、本も読もうと改めて思った。

3月末から始まった新型コロナウイルス感染防止のための自粛生活で読書の時間がたくさんとれると思ったが、コロナの不安にあおられて思うように読めなかった。そんな中で楽しみにして読んだのが講談社のサイトreeの企画「Day to Day」であった。これは日替わりで作家たちが新型コロナが広まっている日本を舞台に短編の小説やエッセイを毎日発表したものである。今この現実とどう向き合っているのか、今なら書けるものもあるし、すぐに読めるのがうれしい。読書の新しい形かもしれない。



女性研では、「ブックトーク」で1冊の本を元に話し合いをしている。それぞれが語る言葉に多くの共感があり、違った考え方もあると納得もする。お互いの顔を見ながら表情や声の調子を楽しんでいる。

今年度から、女性研で図書情報の発信をすることになった。私たちが取り上げた本への思いを、みなさまの読書意欲への刺激にさせていただければと願っております。

（礒部幸江）

『教育オンチが考える 息子の将来、だいじょうぶ?』

細川貂々 著 平凡社
(2015年)



このタイトルと同じことがよく頭に浮かびます。手に取るきっかけは、そこでした。

著者は周囲の人々から「男の子は、学歴が無いと正社員になれないからいつまでも年収は低いままで、結婚もできない」と言われ、慌てるのですが「学校嫌い」であった自分が息子にいい大学へ行け、と言ってもいいのか、いい大学を出れば息子はしあわせになれるのか、と疑問を抱き「わからないから聞きに行こう」と思い立ちます。

「中学受験」「大学受験」の専門家(=大手塾講師)に疑問を投げかけ、その意義について丁寧な説明を受けることから始まり、西の「灘」、東の「開成」へと出向き、そこで行われている教育を見てきます。

ここまでならよくある受験用のサブガイドのような本で終わりますが、著者の疑問は膨らみ、学校のことが分からず始まったこの迷路は「男女の脳の仕組み」や「格差社会」「ロボットの導入」「発達障害」「日本の社会のしくみ」「家族について」等社会の問題へと進み、展開していきます。

また、各章ごとに著者とお連れ合いとの対談があり、たいそう読みごたえがあります。プロの話を二人がさらに掘り下げ、疑問を話し合い、発展させていくのです。子どもたちを取り囲む状況を考え、すべての子どもの幸せを願う人におすすめの一冊です。(佐藤)

『日本のフェミニズム 性の戦い編』 since1886

北原みのり責任編集 河出書房新社 (2017年)



「性の自己決定」この言葉が現在、本来の意味から遠ざかって使われていないだろうか。「性を売るとは、売る本人が自分で決めることなのだから、そう仕向けている社会・組織には責任はない」そういった意味を持ってしまっていないだろうか。この本の問いかけは、徹底して社会から虐げられている女性の傍らから離れないため、傷ついた自分の魂の言葉を、切り捨てずに読むことができる。

性的被害を受けても、服装・化粧等々で自分から誘因を作っているから自己責任、と言われた経験を持つ人も多だろう。現在、日本の社会はどうなっているのか。

明治時代の矢島楫子(公娼制度の廃止等を闘った矯風会の創始者のひとり)たちの活動について、編者はこう述べている——“夫が妻を殺しても罪にならないような時代を体験した女性たちにとって、男女対等の夫婦関係はどれだけ尊い理想だったことでしょう”—— 一夫一婦、禁酒、男女共の貞操をうたう運動は、夫のDV・女性関係が野放しに容認されていたという事実があるからこそ必要だったのだ。立ち返って現在、根本の構造は変わっているだろうか? 憲法は変わり、平等はうたわれている……しかし、「援助交際は、ただではやらせないという点で立派な自己決定」と社会学者が言う。女性の性は安全なところにあると言えるだろうか。家で暴力を振るわれ、逃げても安全な場所にたどり着けず、さらに被害を受ける現実がある。危険な社会がまだまだ口を開けてそこら中を徘徊しているというのに、社会の無責任を、被害者の自己責任にしようとしている。巻末のブックガイドも必見。(野田)

『ババアはつらいよ
アラカン・サバイバル
BOOK』

榎村さとる 地曳いく子 著
集英社 (2018年)



今回紹介する本は、あるお店の古本のコーナーで見つけて購入しました。まずタイトルにひかれ読み始めると目次に「55歳、最大の危機がやってきた」と書いてある。そして「イントロコミック」で始まり、「55歳は人生の「エベレスト」」と進んでいきます。エッセイや対談・チェック表とこの一冊でいろんな楽しみ方ができ著者のいろんなお話に夢中になりました。読みながら「そうそう」「わかるその気持ち」と自分が55歳の頃は何をしていたかな〜!と人生を振り返るもよし若い方が読んでも楽しく人生の老い方を考えるのに参考になりそうな一冊です。

新型コロナウイルス感染防止の自粛生活がなければこの本に出合えなかった。いつもは図書館などで読みたい本を借りますが、施設が休館になり、いつも手に取らないジャンルの本と出会いました。自粛生活は大変だったけど今までの当たり前からこれからの当たり前にしていくにはとてもいい期間だったと考えています。本を読むことは素晴らしい!本を読む大切さをあらためて感じています。(あや)

『何を怖れる フェミニズム
を生きた女たち』

松井久子編 岩波新書
(2014年)



認知症の夫の母と同居する主婦の戸惑いや葛藤を描いた『折り梅』(2002年公開)を観て、自分の母を思って涙したことを覚えている。その監督の松井久子が、ドキュメンタリー映画『何を怖れる』を創った。1970年10月のウーマン・リブ誕生といわれる女性たちのデモから40数年、フェミニズムの第一世代として、最前線を走り続けた人々たちへのインタビューである。映画を1本撮るには莫大な費用がかかる。貴重な記録でもあるからぜひ支援してと、加納実紀代さんから手紙をいただき、私もわずかなカンパをしたから、完成が待ち遠しかった。2014年9月に完成した映画を、私は運動家でも研究者でもないけど、同時代を生きているから、こんなこともあった、こういう人たちもいたと感情移入しながら観ることができた。その時に購入したこの本にも「松井久子」のサインがしてあった。

映画の完成と共に監督は、出演者の中の12名のインタビューを本にしたのである。加納実紀代さんも登場する。加納さんは、「銃後の女性」の戦争責任を問う活動と研究を進めてこられたが、2019年2月に亡くなられた。道を拓いてくれた先輩がまた一人届かぬ人になられたと、お話を聞いたお姿を思い浮かべながら悲しくなった。「闘った、生きた、老いた…リブとフェミニズムを生きた女たちから、いまバトンはあなたに手渡される」この本の帯に書かれている。『何を怖れる』というタイトルの意味を考えながら、私に渡されたバトンは何なのか知りたいと思っている。(磯部)

参考図書



『SDGs入門』村上芽・渡辺珠子著 日経文庫

さいたま市女性学研究会(ゆい)主催
「ブックトーク&井戸端会議」第19回
「SDGs(エスディー・ジーズ)
に詳しくなろう」

お話 埼玉県ユニセフ協会

2020年9月19日(土) 14:00~16:00

パートナーシップさいたま第三会議室

「SDGsって何? 読み方は?」

「持続可能な開発目標と訳されるけれど、具体的にどういうこと?」

「自分や身の回りのことに関連して考えるとすれば、なんだろう?」

……など、基本的なことから学び、今からできることを考えます。

コロナによる世の中の変化に直面した私たちに、SDGsはどんな方向を示してくれるのでしょうか? 私たちは、渦中においても、不安の中で活動しています。女性研としても、「今どうしてる? 何してる? 何思う?」「歴史的にも未曾有の出来事の最中で思うこと。やっていること。」というテーマで、自分の考えを書きまとめたり、仲間の思いに反応したりするなどして、自分の視点でとらえ考え発信しました。自分の抱える思いを大切にしながら、SDGsをいっしょに学びませんか。お問い合わせは、事務局まで。



パートナーシップさいたま耳寄り情報



令和2年度男女共同参画週間記念事業

「STAY HOME」でも学べる
ジェンダー平等ミニ講座

<https://www.city.saitama.jp/006/010/002/004/p072958.html>

毎年6月23日から29日までの「男女共同参画週間」は、男女共同参画基本法(1999年6月23日に公布・施行)についての理解を深める取り組みが行われます。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から「STAY HOME」でも学べるオンラインのミニ講座を配信します(各10分程度)。

近江 美保さん(神奈川大学教授) 誰もが生きやすい社会を作る SDGs目標5「ジェンダー平等」	
渡辺 大輔さん(埼玉大学准教授) 性の多様性を尊重した 社会をつくろう	
栗田 隆子さん(生きる・はたらく事務所) 「非正規労働者」として生きた 「私」のいのちと健康	
西山 さつきさん(NPO法人レジリエンス) 新型コロナウイルス拡大の ストレスケア 家族の在り方を考える	



編集 さいたま市女性学研究会(ゆい)

マーク、題字 野田

<事務局>磯部幸江 電話 048-641-3765 Eメール i.sachie@nifty.com

発行 さいたま市男女共同参画推進センター | パートナーシップさいたま

〒330-0854 埼玉県さいたま市大宮区桜木町1丁目10-18シーノ大宮3F 電話 048-642-8107

<https://www.city.saitama.jp/006/010/002/index.html>